

# 中国人日本語学習者の終助詞の使用に関する一考察

楊 虹

## 1. はじめに

日本語の会話において、「よ」「ね」「よね」等の終助詞はよく見られる。これらの終助詞は、聞き手への伝達態度を表し、円滑なコミュニケーションのためには不可欠であるが、それぞれが担うコミュニケーション上の機能は異なる。そのため、日本語学習者にとって終助詞の適切な使用は、自然なコミュニケーションを行う上で大切であるが難しいと指摘されている（上野1972、大曾1986、ナズキアン2005、米澤2005）。

日本語学習者を対象とした終助詞の研究は、「ね」「よ」「よね」に関するものがほとんどであり（Sawyer1992、初鹿野1994、張2005、山田2006、船戸2008、何2008、楊2008a, b）、中でも、「ね」に関する研究が圧倒的に多い。その理由として、終助詞の習得は「ね」「よ」「よね」の順となっており（峯1995）、「ね」は初級学習者にも見られること、また「ね」が学習の早い段階で使用されるものの、その発達はゆっくりしていることが挙げられる（初鹿野1994）。しかし、実際に学習者の終助詞の使用に関する縦断的調査においては、初級を対象とした研究がほとんどであり、中級より上の学習者を対象とした縦断研究は管見の限り文字チャットの効果を検証した船戸（2008）のみである。そこで、本研究は、中級及び中上級学習者を対象に、日本滞在期間中の10カ月間における会話の中での終助詞の使用状況を調査し、その習得過程の分析を試みた。

## 2. 先行研究

日本語母語話者が日常的によく使うこれらの終助詞は、日本語学習者にとって、初級段階で導入される表現であるにもかかわらず、適切に使用することが難しい（ナズキアン2005）。ナズキアン（2005）は、日本語を学ぶ初中級の学習者には、終助詞なしの応答が多く見られると指摘し、そのような応答は母語話者にぶっきらぼうに聞こえる恐れがあり、適切に使用できるよう授業で指導する必要があるという。

ナズキアン（2005）は授業中の教師と学生のQ&A形式の会話練習に見られる学習者の発話を対象に議論しているが、実際の会話において学習者の終助詞の使用実態はどのようなものだろうか。初鹿野（1994）は、非漢字圏の初級日本語学習者4人を対象として一年間にわたって収集した資料を分析した結果、観察された終助詞はほとんど「ね」と「か」であり、また「ね」を中心に分析した結果、「そうですね」のような定型表現での使用が多く見られるという。また、一年間にわたり「使用数、正用数ともにほとんど増えないタイプ」と、「濫用し、誤用を重ねながら徐々に習得していくタイプ」があり、個人差があることを指摘している。

また、谷口（1998）は、ブラジル人自然習得者8人を対象として10カ月にわたって収集した資料を分析した結果、「ね」が最も早い段階で使用されることが共通して見られたと報告している。また、個人差

はあるものの、複数の対象者に「ね」の過剰使用が見られたという。谷口（1998）では、調査対象者の日本語能力についての言及は見られないが、データ及び分析結果から、対象者は初級から初中級に相当すると推測される。絵の説明をデータとしているため、会話やインタビューなどでは初級でも見られる「そうですね」について谷口（1998）は言及していないが、「ね」が習得されやすいという教室学習者に関する初鹿野（1994）の指摘は自然習得者の「ね」の早期使用や過剰使用にも当てはまるのではないかと考えられる。

次に、中国語母語話者を対象とした研究を検討する。山田（2006）は、クローズドテストによる調査を実施した結果、中国人学習者に「よ」と「ね」の混同が見られると指摘し、その原因を、母語の影響と中国で使用した教科書の説明不足によるものだとしている。

上級以上の台湾人学習者を対象とした張（2005）及び中上級中国人学習者を対象とした楊（2008a）は、学習者の「ね」の使用について調査した結果、日本語母語話者と比べ、学習者の「ね」を伴う発話には「相づち的な発話」と分類されるものが少ない、という共通の結果を報告している。また、楊（2008b）は、学習者の「よね」の使用を日本語母語話者と比べ、その使用がきわめて少ないことを指摘している。

また、日本語能力の異なる発達段階における学習者の「ね」の使用状況を調査した研究に、何（2008）、船戸（2008）がある。何（2008）は、KYコーパスのデータを使い、中国語母語話者の初級、中級、上級学習者の「ね」の使用状況を分析した。その結果、初級の段階から「ね」の使用が見られ、日本語レベルが上がるにつれ、使用される「ね」の機能が広がることが明らかになった。また何（2008）は、初級から上級学習者に一貫して見られる不適切な使用について、「ね」と「よ」の機能を十分把握していないことが原因だと指摘している。

船戸（2008）は、JFL環境にいる台湾人母語話者と日本語母語話者による文字チャット及び音声チャットを分析資料とした縦断的研究である。船戸（2008）では、終助詞「ね」の分析を行った結果、調査前期と比べ、調査後期には、「ね」の生起する全体数及び「同意要求」「同意表明」の機能を持つ「ね」が増えると報告している。ただし、音声チャットの変化は文字チャットでの変化ほどなかったという。

以上のように、学習者の終助詞の研究において、「ね」の使用が最も多く見られるが、複数の機能を持つため、中上級学習者でも、その使用は日本語母語話者と異なることが指摘されている。また、中国人学習者を対象とした終助詞の縦断的研究はまだ少ない。とりわけ日本滞在期間中の終助詞の使用の変化に関する研究はほとんどない。そこで、本研究は「ね」を中心とした終助詞の使用の変化を解明することを目的とし、2人の中国人学習者の日本滞在中の10ヶ月の間に行われた5回の会話に見られる終助詞の分析を試みた。分析において、以下の課題を設けた。

課題1 学習者TとYの発話に見られる終助詞全体の使用に変化があるか。

課題2 学習者TとYの発話に見られる終助詞「ね」の機能に変化があるか。

### 3. 調査対象者及び方法

調査対象者は文部省の奨学金を得て、日本語・日本文化研究生として、2002年10月に来日した中国人学習者TとY（ともに女性）である。Tは中国の大学で4年間日本語を専攻して、卒業後間もなく来日した。Yは、中学校で日本語を3年間学習した経験を持つが、大学では日本語と関連のない分野を専攻して、学部3年次に来日した。二人とも、日本の大学では留学生向けの授業のほか、日本人学生との合同授業や学

部の授業もとっているが、日本語の学習そのものを主目的とする授業はなかったという。また、入学時に大学側が行うSPOTテストA紙（65点満点）を受け、Tの得点は56、Yの得点は53だった。二人が受けている留学生向けの授業の担当教師は、Tは中上級、Yは中級学習者に相当するとしている。

学習者TとYは筆者の研究に協力するという形で日本語母語話者と初対面で20分間の日本語での会話を2002年12月から2003年9月の間に不定期に計5回行った<sup>1</sup>。収録は初めの2回はICレコーダーによる録音で、3回目以降はビデオ録画も合わせて行った。収録時に筆者は席をはずした。調査協力者の日本語母語話者は20代前半の大学生または院生（女性）で、TとYとは初対面である。

調査対象者及び協力者には具体的な調査目的を事前に知らせずに行った。1回目～3回目には話しやすいよう、双方それぞれに話題を2つずつ与え、それを取り上げてよいが、基本的には自由に話して良いと指示した。協力者に会話終了後に会話内容に関するアンケート調査とインタビューを実施した。

#### 4. 分析方法

T及びYと日本人協力者5人（J1～J5）の会話録音の冒頭から20分までの文字化資料を分析対象として用いた。

課題1については、まず終助詞を含む文を特定し、各終助詞の使用回数（誤用を含む）を分子に、発話数<sup>2</sup>を分母にして、終助詞の使用率を求めた。一般に文末に用いられる助詞を終助詞とするが、どこまでを終助詞として認めるかについて共通の認識がない（野田2002）。本研究では、野田（2002）に従い、「よ」、「ぞ」、「ぜ」、「わ」、「さ」、「ね」、「な」及び複合形式「よね」を終助詞の分析対象とする。なお、「ね」については、文節末に現れる間投助詞的用法も含む<sup>3</sup>。また、学習者の終助詞の使用が適切かどうかの判断を行った。終助詞そのものの使用が適切であれば、他の語彙や文法的な要素により発話が不自然な場合や相手に伝わらなかった場合でも正用とした。

課題2については、陳（1987）、伊豆原（1993）、野田（2002）等を参考に、伊豆原（1993）の3分類を修正して使用し（表1参照）、「ね」の機能の分類を行った。

なお、終助詞の正用／誤用の判断及び機能の分類は、日本語教育に従事する日本語母語話者の協力を得て、筆者と別々に判定して、一致するまで協議した。

表1 ねの機能の分類

分類	定義	例
A 引き込み型	話し手が談話を展開していく時、話し手が始めた話を聞き手に持ちかけ、聞き手をその話の中に引き込むもの。聞き手に状況説明したり、状況を目に見えるように伝えたりするときに使われる。	C 文系だと、詩を調べて、(書く手振り)簡単だと思いますけどね J ああ
B 共感共有型	話し手が聞き手の発話を受け、話題・情報を共有しようとしていることを表し、聞き手への一体化を図ろうとするもの。相づち及び応答である。	J でもそろそろ卒論を書かないといけないから C 大変ですね
C 確認要求型	話題や情報がすでに共有されている時、話し手が聞き手に同意や確認をしたり、同意や確認を求めるもの。	J 太平洋側のすごく暖かいところなんですよ。 C 鹿児島島の北のほうですね J そうです

## 5. 結果および考察

### 5.1 終助詞全体の使用の変化

TとYの5回の会話に見られた終助詞を表2と表3にまとめた。TとYは、ともに「ね」、「よ」、「よね」、「な」という4つの終助詞が見られ、また誤用も認められた。

TとYの終助詞における「ね」と「よ」の使用率は異なるが、いずれも「ね」の使用が最も多く、「な」の使用が最も少ない。「な」の使用が少なかった理由としては、「な」は一人言としては女性も使うが<sup>4</sup>、基本的には男性によく見られる終助詞であることが考えられる（陳1987）。

表2 Tの終助詞の使用数及び使用率

( ) 内の数字は誤用数である。

	ね		よ		よね		な		計	
1回目	10	(1) 10%	1	1%	0	0%	0	0%	11	11%
2回目	22	(1) 14%	13	(4) 8%	0	0%	1	1%	36	23%
3回目	18	10%	6	3%	1	1%	1	1%	26	15%
4回目	7	5%	1	1%	3	2%	0	0%	11	8%
5回目	11	7%	7	(2) 4%	2	1%	0	0%	20	12%

表3 Yの終助詞の使用数及び使用率

	ね		よ		よね		な		計	
1回目	12	12%	0	0%	2	2%	0	0%	14	14%
2回目	20	(3) 15%	1	1%	8	6%	0	0%	29	22%
3回目	45	(5) 23%	1	1%	1	1%	1	1%	48	25%
4回目	9	7%	3	2%	1	1%	0	0%	13	10%
5回目	21	(1) 16%	1	1%	0	0%	2	2%	22	17%

#### 5.1.1 学習者Tの終助詞全体の使用の変化

学習者Tが用いる終助詞を見ると、「ね」が最も多く見られ、次いで多かったのは「よ」である<sup>5</sup>。「よね」については、1回目と2回目には1回も見られず、滞日半年以上経ってからも、使用が少ないことがわかる。また、誤用について見ると、「ね」は3回目以降は見られず、それに対して「よ」の誤用は最後まで見られた。以下では誤用例を挙げながらTの終助詞の使用上の問題点を考える。

まず「ね」について検討する。会話例1は1回目の会話における誤用例である。ここでは、TはJ1が広島出身であることを受け、出身大学の先生も広島出身だと話した(1T)。ここでは挿入句「女性ですね」は「女性ですけど」の誤用だと考えられる。

会話例2では、京都旅行の代金が五千円だと話し、J2の「あら」という驚きの反応を受けて、「すごく安いですね」と話した(3T)。ここでは相手の同意を確認する場合、「安いですよね」を用いるべきであろう。

会話例1

- 1T 私のあの、大学の先生、女性ですね、その先生の主人は、広島出身です。  
2J1 えー、言葉は標準語話しますか。

会話例2

- 1T 全部含めて五千円ですから、  
2J2 あら  
3T すごく安いですね、でも3人しか参加できないから、  
4J2 定員が  
5T できなかった。

終助詞「ね」は「ですね」の形で表れることが多いと指摘されているが（佐々木2009）、Tの5回にわたる会話に生起する「ね」を見ると、間投用法の「ね」が2回、「思うね」「違いますね」が1回ずつ見られたほかは、すべて「ですね」である。中には、「目立つですね」のような発話も見られる。ただし、回を追うごとに「そうですね」の割合が下がり、「ね」が付加する文末形式のバリエーションが増え、誤用もなくなることを考えると、Tの「ね」の使用は「誤用が見られる時期」→「『ですね』の過剰般化の時期」→「誤用がなくなる時期」へと移行していたと推測される。

一方、「ね」と比べ、終助詞「よ」の誤用は、数が多く、また最終回の会話にも見られた。以下では会話例を見ながら検討する。

「よ」は基本的に「聞き手を情報を持たない人の立場に置くことに問題がない場合」（伊豆原1994）、「聞き手が文の内容を認識すべきだと話し手が考えていることを表す」（野田2002）働きを持つ。すなわち、「よ」の使用には、話し手の領域に属する情報であり、かつ聞き手への強い働きかけが必要である文脈、という2つの条件がある。Tの誤用はこの2つの条件のいずれかを満たさないために起こるものである。

まずは、聞き手領域に属する情報に関する発話に「よ」を付加する誤用例を見てみる。会話例3では、Tは日本家屋に興味があることを話し、玄関のことを描写する発話に、「よ」を付加した（4T）。ここでは一般に日本人であるJ2のほうが日本家屋についてより多くの情報を持つと考えられるため、「よ」を付加するのは不適切である。もし、聞き手を会話に引き込み、聞き手との一体感を作りだす効果を狙うのであれば、ここでは「ね」を付加することができる。

会話例3

- 1J2 ああ分かった部屋に上がるときに靴を脱ぐとか、  
2T そうそうそうですね。  
3J2 そういう習慣が  
4T それにあの、この階段は、こっちとの間かなり段差があるよ。

次に、聞き手が持つ情報ではあるが、「よ」の使用により聞き手に押しつけがましいという印象を与える誤用例を検討する。会話例4では、夏休みのアルバイトの経験を語り出すTは、初めての経験であることを伝える際に「よ」を用いた（3T）。話し手のみが持つ情報である場合、「ね」は、自分が有する知識

や意向の在り方が、聞き手が持っていると想定される知識や意向のあり方と一致する方向にあるが、「よ」は対立する方向にある（益岡1991）。そのためこの話題導入の部分において相手が持っている知識を対立する方向にあると想定するのは難しく、一般に「よ」の使用が不自然であり、相手に押しつけがましい印象を与える。

#### 会話例 4

- 1T バイトやりました。  
2J5 ああ、そうなんだ。  
3T はじめての経験ですよ。楽しかったんです。

Tの「よ」の誤用を見ると、3回目以降の会話では、聞き手領域の情報に「よ」を付加するタイプの誤用はなくなったものの、聞き手への強い働きかけが求められていない文脈においても、「よ」を用いるため相手に押しつけがましい印象を与える誤用は最終回の調査時でも認められた。

#### 5.1.2 学習者Yの終助詞全体の使用の変化

Yの場合、「ね」の使用が多かったのに対し、「よ」の使用が少なかった。また、Tと比べ、「よね」は早い段階から使用されており、誤用も見られなかった。一方で、「ね」の誤用は比較的多く、最終回にも見られた。

会話例 5 では、J2の個人的な行動について説明した発話に対して、Yは「そうですね」と相づちで同意を示す。ここでは、J2の個人的な経験はYにとっては新しい情報であり、それを受け取ったことを示す「そうですね」が適切であると考えられる。

#### 会話例 5

- 1J2 それで、もう時々我慢できなくて、個人的に磨いていました。コンロとか。  
2Y そうですね。ちょっとあのう、うん、掃除する人とかいとると楽ですけど。

また、Yは話題導入部で相手に質問をする際に、「ね」を用いた。会話例 6 では、J3の身長を尋ねる発話に疑問の「か」を用いずに「ね」を用いた (1Y)。このタイプの誤用は最終回の会話にも見られた。学習者Yは、Tと異なり、「ですね」に集中することなく、「ます」「けど」「から」等さまざまな文末形式に「ね」を付加しているため、「ね」の使用数が多かったが、その使い分けを正しく理解せずに文末に付加していると推察される。

#### 会話例 6

- 1Y どのぐらいありますね。64ぐらい？  
2J3 あ、もうちょっとあります。

## 5.2 終助詞「ね」の機能の変化

この節では、TとYに最も多く見られる「ね」の機能の変化について検討する。

### 5.2.1 学習者Tが用いる「ね」の機能の変化

Tが用いる「ね」の機能を見ると、いずれの回においても、B型が最も多く見られ、しかも2回目を除けば、増加する傾向が見られ（表4参照）、「ね」の機能に大きな変化は見られなかった。

表4 Tが用いる正用の「ね」の機能（割合）

	A引き込み型	B共感共有型	C確認要求型	計
1回目	2 (22%)	6 (67%)	1 (11%)	9 (100%)
2回目	8 (38%)	9 (43%)	4 (19%)	21 (100%)
3回目	5 (28%)	12 (67%)	1 (6%)	18 (100%)
4回目	1 (14%)	5 (71%)	1 (14%)	7 (100%)
5回目	2 (18%)	9 (82%)	0 (0%)	11 (100%)

B型は、聞き手発話として、相手に同意を示したり、評価を加える発話に「ね」が付加されるものであり、定型表現の相づち「そうですね」を含む。5.1で述べたように、Tには、「(そう) ですね」の過剰使用が見られ、1回目において、B型に見られた6回の「ね」はすべて、2回目に見られた9回のうち6回は、「そうですね」である。一方、話題を開始する際に、相手を話に引き込み、共感を得るA型は、1回目では2回で、4回目と5回目においてもそれぞれ1回、2回しか見られなかった。伊豆原(1993)では、この用法は終助詞がなくても不自然ではなく、「ね」を使用することで聞き手との気持ちの一体化、共有化を求めようとする話者の働きかけを表していると述べている。一方で、Tの5.1で挙げられた「よ」の誤用が見られた発話は、いずれも「ね」を付加できるものである。ここから、学習者に対する指導において、「よ」と「ね」の機能を把握させ、聞き手との一体感を作りだすA型及びC型の機能を意識させることが効果的な使用につながると推察される。

### 5.2.2 学習者Yが用いる「ね」の機能の変化

学習者Yが用いる「ね」の機能を見ると、B型の割合が高いTとは異なり、相づちや同意を示すB共感共有型の割合は低く、最も高い場合でも50%に満たず（表5参照）、「ね」の各機能の全体に占める割合の変化から特定の傾向は見られなかった。

表5 Yが用いる正用の「ね」の機能

	A引き込み型	B共感共有型	C確認要求型	計
1回目	10 (83%)	2 (17%)	0 (0%)	12 (100%)
2回目	4 (24%)	8 (47%)	5 (29%)	17 (100%)
3回目	24 (60%)	11 (28%)	5 (13%)	40 (100%)
4回目	3 (33%)	2 (22%)	4 (44%)	9 (100%)
5回目	5 (25%)	6 (30%)	9 (45%)	20 (100%)

大曾（1986）は、聞き手の領域に属するものに対するコメントに「ね」を付加して共感を示す用法は学習者にはなかなか使いこなせないと指摘しているが、Yの「ね」の機能の結果は、この指摘と一致している。Yには、会話例5に見られるようなB共感共有型の過剰般化と思われる誤用が見られる一方、B共感共有型の使用そのものは少ない。すなわち、Yは、B共感共有型を正しく理解していない可能性が考えられる。

## 6. まとめと今後の課題

本稿は2人の中国人留学生が滞日一年間の間に、日本語母語話者との5回の会話に見られる終助詞を分析した。その結果、学習者の終助詞の使用率は、滞日期間が長くなるにつれ上がるといった傾向は見られず、その変化は一定していなかった。また、2人の学習者の終助詞の誤用や、使用傾向に異なる特徴が見られた。学習者Tは、相手に共感を示す相づち「そうですね」を多く使うが、その他の機能を持つ「ね」の使用が少なく、聞き手を会話に引き込むために「ね」の代わりに「よ」を使う場面が見られた。一方、学習者Yは、相手に共感を示すB共感共有型の機能を持つ「ね」の使用割合が低く、調査の初期の段階から、さまざまな形式の文末に「ね」を付加して用いていたことが明らかになった。そのため、「ね」の過剰使用と思われる誤用が見られた。上記の学習者TとYの終助詞の使用傾向は、日本に滞在していた10か月にわたって見られ、1年間という滞在期間は、終助詞の使用に大きな変化をもたらすことがなかったと言えよう。

峯（2006）は、学習者の内省アンケートを分析し、初級から中級前期の学習者には授業の影響が大きいものに対して、中級後期から上級日本語学習者の文末表現<sup>6</sup>の使用頻度には、日本人との接触頻度がより大きな影響を与えると指摘し、「日本人のまねをして使ってみるようになった」等学習者のストラテジーを紹介している。一方、ブラジル人自然習得者の追跡調査を行った谷口（1998）では、来日20か月以上の場合でも、終助詞の使用は「ね」に限られ、「よ」は8人中2人のみであると報告している。本研究と谷口（1998）では、対象者の学習環境が異なるだけでなく、日本語レベル、母語も異なるので、単純に比較することはできないが、本研究では日本滞在1年の学習者の終助詞の使用に大きな変化が見られなかったことから、中上級の学習者に対しても、日本人のまねをして使ってみるだけでなく、授業の中で気づきを促す指導の必要性も窺われる。しかし、実際に日本語教育における終助詞の扱いを見ると、教科書での扱いは必ずしも十分とは言えない。一般的な日本語の総合テキスト46種類における終助詞の扱いを調べた米澤（2005）によれば、終助詞の機能の説明があるのは、10種類にすぎず、学習項目として終助詞を扱うものは、16種類にとどまるという（米澤2005）。今後自然会話の場面や映画、ドラマのシナリオ等を取り入れる等、より効果的な指導方法を探る必要が示唆される。

本研究は、終助詞の抽出を目的として実施した会話調査ではなかったため、学習者の会話に見られる終助詞そのものが少なく、また、会話の相手や話題によって、終助詞の使用が異なることも考えられるため、終助詞使用の実態のすべてを表しているとは言えない。しかし、中国語母語話者の終助詞の使用に関する縦断的研究がほとんどないため、本研究は、自然会話をデータに用いて、日本滞在期間中の10か月にわたる二人の学習者の終助詞使用の実態を明らかにし、それぞれの特徴を記述したケーススタディとして意義があると考えられる。今後はさらに会話のデータを蓄積し、分析を進めたい。

注

- 1 会話の収録は、2002年12月、2003年1月、5月、7月、9月に行われた。
- 2 発話数は、「はい」「うん」のような感声的な相づちを除くすべての発話を対象とした。
- 3 終助詞「さ」も間投助詞的用法があるが、本研究では見られなかった。
- 4 例えば「行こうかな」、「いいなあ」等である。
- 5 メイナード（1993）は、日本人の発話のなかに出現する「ね」と「よ」の割合はおおよそ3：1であると指摘していることを考えると、Tの2回目と5回目における「よ」の使用率は極めて高いと思われる。
- 6 峯（2006）で文末表現としているものは、本研究の終助詞に相当する。

参考文献

- 伊豆原英子（1993）「「ね」と「よ」再考—「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から」『日本語教育』80, 103-114.
- 伊豆原英子（1994）「終助詞「よ」の使用と使用制約—情報と待遇性の関わりから「よ」の使用条件を探る—」『日本語・日本文化論集』1, 43-63.
- 上野田鶴子（1972）「終助詞とその周辺」『日本語教育』17, 62-77.
- 大曾美恵子（1986）「誤用分析1『今日はいい天気ですね。』—『はい、そうです』」『日本語学』5(9), 明治書院, 91-94.
- 何桂花（2008）「日本語教育における終助詞「ね」の習得の特徴—インタビュー形式の会話における中国語を母語とする学習者を中心に」『日本語・日本文化研究』18, 117-126.
- 佐々木泰子（2009）「談話分析の日本語教育への応用の可能性」『多文化共生社会における幼児から大学生までのコミュニケーション能力育成モデルの開発』, 147-154.
- 張鈞竹（2005）「台湾人日本語学習者の終助詞「ね」の使用—コミュニケーション機能を中心に」『言語情報学研究報告』6, 281-299.
- 陳常好（1987）「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞」『日本語学』6(10), 明治書院, 93-109.
- 谷口すみ子（1998）「絵の説明のタスクの分析結果」『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究』（平成6年度～平成8年度科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書, 代表者土岐哲）, 23-31.
- ナズキアン富美子（2005）「終助詞「よ」「ね」と日本語教育」『言語教育の新展開—牧野成一教授古稀記念論集』, 167-180, ひつじ書房.
- 野田春美（2002）『モダリティ新日本語文法選書4』（第8章終助詞, 261-288）, くろしお出版.
- 初鹿野阿れ（1994）「初級日本語学習者の終助詞習得に関する一考察—「ね」を中心として」『言語文化と日本語教育』8, 14-25.
- 船戸はるな（2008）「文字チャットの学習効果及び音声会話への影響—終助詞「ね」に注目して—」『2008年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 191-192.
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』, くろしお出版.
- 峯布由紀（1995）「日本語学習者の会話における文末表現の習得過程に関する研究」『日本語教育』86,

56-80.

峯布由紀 (2006) 第二言語習得における「授業」と「言語接触」の影響についての考察—日本語文末表現の使用に関する内省アンケート調査をもとに—『人間文化論叢』9, 265-275.

メイナード, K. 泉子 (1993) 『会話分析』, くろしお出版.

山田京子 (2006) 「中国語母語話者の終助詞「よ」の運用に関する問題点—「よ」と対応する中国語表現との対照研究から—」『早稲田大学日本語教育研究』, 125-135.

楊虹 (2008a) 「中日接触場面の初対面会話における「ね」の分析—共感構築の観点から—」『東京成徳大学人文学部研究紀要』15, 125-136.

楊虹 (2008b) 「中日接触場面の初対面会話における終助詞「よね」の分析」『社会言語科学会第21回大会発表論文集』, 222-225.

米澤昌子 (2005) 「終助詞の使用頻度と性差傾向：シナリオを資料として」『同志社大学留学生別科紀要』5, 49-60.

Sawyer, Mark(1992) The Development of Pragmatics in Japanese as a Second Language: The Sentence-Fine Particle NE, in Gabriele Kasper(ed), *Pragmatics of Japanese as Native and Target Language*, University of Hawaii, Second Language Teaching & Curriculum Center, pp.85-113.